

は悠遠にして險阻であらう。併し我々の胸に日本の運命への止み難い悲願がおののいてゐる限りは、この悠遠にして險阻な道にもまた自らにして拓かれる通路があるにちがひありません。

(丸山 靜)

支那歷代風俗事物考

尙 秉 和 著
秋 田 成 明 譯

昭和十八年八月三十日 大雅堂發行
A 5 判本文五一七頁 賣價七圓八拾九錢

長友秋田成明君の好譯を一讀して支那史の廣々とした展望が眼前に新たに鮮明な姿をもつて開かれた感じがした。と云ふのは假りに「支那近世一士大夫の生活」をとても題して或る貴族の傳記を綴るとしたら、彼が一體どんな邸宅に住み、その部屋はどんな色彩をもつた如何なる種類の調度で飾られ、彼はどんな服裝に身を正して朝廷に出仕したり、同僚友人と飲宴したであらうか、その道路や會合の席の様子はどんなだつたかなどについて、繪巻物を心の中であるべく明確にくりひろげられなければならない、無味乾燥な史書の文字を通してだけで時代を隔て民族を異にし風土の違つた一人の人間の生活の外面にさへ觸れにくいであらう。

前清の進士で幼時から清朝の風俗を見聞する機會があり、長じて民國の際中國大學教授としてこの他に「歷代社會狀況史」等の著述で知られる尙氏の原著「歷代社會俗事物考」四十四卷は私は未だ見てゐないが譯者序文によるとかなり大部で項目の

出入もあり、若干出典の誤脱もあるらしい。秋田氏の譯書は異同を裁正し二十章に壓縮し、その上必要な註記と理解を大いに容易ならしめてゐる挿圖多數を加へたものである。中になほ重複する記事の存在するのは實に原著者が一の史料を多方面に活用し古人の生活を彷彿させんとした努力の跡を示すものに外ならぬ。二十章の題目は、三代以前(傳説時代)の社會狀態、衣服、飲食、住居、燈火・薪水・車駕、都市・村落、祝祭、俗信仰、教育、婚禮、喪葬、敬禮・敬稱・訴訟、及び官吏、平民の仕官・納稅、經濟・旅行・軍事、各種の遊戲、社會雜事、妓女であり、冒頭した如く、古人(勿論古代から清末に及び現狀にもふれる所があるが)の全生活面を浮び上らせる効果がある。

原著についていへば、上古の傳説的史料や周禮の記述を批判を加へず直接的史料として扱つてゐるらしい態度が先づ氣にかゝり、風俗慣習の理由の説明などに稍々腑に落ちぬ個所があるのを感じる位である。「歷代社會狀況史」のかなり難しい典故にうづまつた活版の漢字を讀むのには辛抱を要した。今この著を増補した本書の譯篇においては平易にしてかつ正確な譯解、淡々としてしかも興味つきぬ行文により、恐らく原著よりはるかに樂な氣持で支那民族の生活に入つてゆかれる思ひがする。地理的年代的考證や、制度組織の煩瑣な一面や、統計の數字で能事たりと考へやすい一般東洋史家はもとより、一般支那に心をよせる識者の味讀に値ひする良書として心から本書の刊行を喜ぶと共に推奨の辭を惜まぬものである。(宮川尙志)